



Oracle Universal Content Management 11g Release 1

11g Release 1と10g Release 3の違い

2010年6月

このドキュメントでは、Oracle Universal Content Management (Oracle UCM) のバージョン違いである、11g Release 1と10g Release 3のおもな違いについて説明します。また、11g Release 1に関する一般的な情報と関連ドキュメントへのリンクを記載しています。

製品アーキテクチャ

Oracle Universal Content Management 11g Release 1ではアーキテクチャが変更されており、Oracle WebLogicアプリケーション・サーバーへの配置がサポートされています。このアーキテクチャの拡張によって、より柔軟な配置オプションが選択できるようになっただけでなく、Oracle UCM 10g Release 3では提供されていなかった追加のクラスタリング機能や管理機能が使用できるようになりました。また、以前のバージョンとは異なり、Oracle UCM 11g Release 1ではスタンドアロンの配置用Webサーバーは必要ありません（サポートもされていません）。Oracle UCM向けのJava基盤とWeb層は、Oracle WebLogic Serverによって提供されます。配置のモデルとオプションについて、詳しくはエンタープライズ・デプロイメント・ガイド (http://download.oracle.com/docs/cd/E14571_01/doc.1111/e15483/toc.htm) を参照してください。

インストール

Oracle UCM 11g Release 1のインストール・プロセスは、その他のOracle Fusion Middleware製品との一貫性を確保するため、10g Release 3以降で改善されています。Oracle UCM 11g Release 1ではインストール・プロセスの一部として、Oracle Universal InstallerとOracle Repository Creation Utilityが使用されています。Oracle UCM 11g Release 1のインストール方法については、クイック・インストール・ガイド (http://download.oracle.com/docs/cd/E14571_01/doc.1111/e14538/toc.htm) または詳細なインストール・ガイド (http://download.oracle.com/docs/cd/E14571_01/doc.1111/e14495/toc.htm) を参照してください。

管理

データベース接続

Oracle WebLogic Server上への配置が可能になったことで、Oracle UCMはWebLogicに組み込まれた多数の機能を利用できるようになりました。このような重要な機能の1つに、データベース接続プーリングがあります。Oracle UCM 11g Release 1では、メタデータやその他のOracle UCM情報が格納されているリレーショナル・データベース (Oracle Content Serverのシステム・データベース) と通信するために、WebLogicデータソースが使用されています。その結果として、JDBCのユーザー名とパスワードなどのデータベース接続情報は、Content Serverの構成ファイル (config.cfg) に保存されなくなりました。この情報はWebLogicで管理されており、Oracle UCMが配置されているドメインのWebLogic管理コンソールを使用して、データソースごとに変更できます。データベース接続情報がContent Serverの構成ファイルに含まれていないため、デフォルトでは管理アプレット (Oracle Configuration ManagerやRepository Managerなど) をスタンドアロン・モード (サーバー上のコマンド・プロンプトから起動するモード) で起動したり、機能させたりすることはできません。アプレットをサーバーからスタンドアロン・モードで実行するには、データベース接続情報をContent Serverの構成ファイルに追加する必要があります。この作業は、System Propertiesアプレットから実行できます。Oracle UCM 11g Release 1とデータベースおよび関連構成ファイルとの通信方法について、詳しくはシステム管理者ガイド (http://download.oracle.com/docs/cd/E14571_01/doc.1111/e10792/toc.htm) を参照してください。

Content Serverへのデータベース・プロバイダの追加

11g Release 1においても、引き続きOracle UCMの管理者がContent Serverに追加のデータベース・プロバイダを作成できます。これには、次のいずれかの方法を使用します。

- a. Oracle UCMが配置されているドメイン上にWebLogicデータソースを1つ作成し、Content Serverのデータベース・プロバイダがこのデータソースを使用するように設定します。WebLogicデータソースを作成するには、Oracle UCMが配置されているドメインのWebLogic管理コンソールを使用します。
- b. Content Serverのデータベース・プロバイダを作成し、Oracle WLSデータソースを使用せずにJDBC経由で直接データベースに接続します。このモードはおもに、2次データベース・プロバイダを持つ既存顧客のために提供されています。

ログイン・メカニズム

Oracle UCM 11g Release 1では、基本認証（10g Release 3でのデフォルト・メカニズム）の代わりに、フォームベースのログイン・メカニズムがデフォルトで提供されています。このため、ユーザーはブラウザを終了しなくても、Content Serverからログアウトできます。基本認証に対するサポートは継続されており、WebDAVのログインで使用することもできます。Content ServerへのWebDAV通信は、独立したコンテキスト・ルート（"_dav"という名前を使用）からアクセスできる別個のWebアプリケーションを介して実行されます。

ユーザー管理

WebLogicアプリケーション・サーバーへ配置された結果としてOracle UCMに生じたおもな変更の1つに、ユーザー管理の領域があります。Oracle UCM 11g Release 1では、ユーザー名とパスワードを管理するためのデフォルト・ロケーションとして、WebLogicに組み込まれたユーザー・ストアが使用されます。つまり、ユーザーの作成やロールの割当ては、User AdminアプレットではなくWebLogic管理コンソールを使用して実行されます。Content Serverでは、ユーザー認可を目的としてWebLogicユーザー・ストアと通信するため、デフォルトでJPSプロバイダがインストールされます。

ユーザー認証は完全にWebLogic Serverによって処理され、ログイン時のユーザー認証プロセスにContent Serverが関与することはありません。この際、WebLogic Serverはユーザー・ストアに存在しないユーザーを認証することはできません。このため、Content Serverで"ローカル"ユーザーとして作成されたユーザーは（Content Serverのデータベース・スキーマのみに存在するため）、WebLogicによる認証を受けられません。Content ServerのUser Adminアプレットではローカル・ユーザーを作成できますが、同じユーザーがOracle WLSでも作成され、パスワードが割り当てられている場合を除いて、このユーザーがWebインタフェースからContent Serverにログインすることはできません。Oracle UCM 11g Release 1以降で推奨されるアプローチは、UCMで認定されているLDAPユーザー・ストア（Oracle Internet Directoryなど）を使用して、すべてのユーザー管理タスクを実行する方法です。既存のUCMシステムにローカル・ユーザーがいる場合、これらのユーザーを外部のユーザー・ディレクトリ・システムに移行し、Oracle UCM 11g Release 1で使うことが推奨されます。

Content Serverの管理アプレットをスタンドアロン・モードで実行する場合、以前と同様に"ローカル"ユーザーが少なくとも1名は必要になります。スタンドアロン・モードでのアプレット実行について、詳しくはシステム管理者ガイド (http://download.oracle.com/docs/cd/E14571_01/doc.1111/e10792/toc.htm) を参照してください。

Assign Userアプレット (チェックイン・フォームでユーザーACLを選択する際に使用) に表示されるのは、Content Serverに少なくとも1回ログインしたことがある外部ユーザーのみです。デフォルトのWebLogicユーザー・ストアやその他のLDAPシステムに含まれるユーザーはすべて外部ユーザーであるとみなされます。この動作は10g Release 3での動作と同じです。ACLを使用しており、外部システムに含まれるユーザーを直接参照して割り当てる必要がある場合、Content Serverから外部システムのユーザーを認識するためのカスタマイズが必要になります。このカスタマイズに関心のある場合、Oracle Consulting Servicesを利用してアドバイスを得ることが推奨されます。

LDAPプロバイダとJPSプロバイダ

ユーザーやロール対ユーザーのマッピングは外部ユーザー・ディレクトリで管理されるようになりましたが、ロール、セキュリティ・グループ、アカウントの作成と管理には、10g Release 3の場合と同様に11g Release 1でもContent ServerのUser Adminユーティリティが使用されます。また、ロールとアカウントは、LDAPプロバイダを使用してマッピングできます (10g Release 3と同じ)。さらに、JPSプロバイダを利用した新しいメカニズムによって、WebLogicアプリケーション・サーバーのユーザー管理インフラストラクチャであるOracle Platform Security Services (OPSS) を介し、Content Serverから直接外部ユーザーを参照できるようになりました。Content ServerによってデフォルトでインストールされたJPSプロバイダは、OPSSを使用してユーザーに関する情報を送受信します。JPSプロバイダとLDAPプロバイダに関して、またこれらのプロバイダを使用してContent Serverに外部ユーザー・ディレクトリを構成する方法について、詳しくはシステム管理者ガイド (http://download.oracle.com/docs/cd/E14571_01/doc.1111/e10792/toc.htm) を参照してください。

Content Serverの管理サーバー

Oracle UCM 11g Release 1では、Content Serverの各インスタンスに独自の管理サーバー・インスタンスが含まれます。この管理サーバーをWebLogic管理サーバーと混同しないでください。Content Serverの管理サーバーは、管理者がコンテンツ・サーバーの構成設定を変更するためのWebアプリケーションであり、以前のようにContent Serverの起動や停止、再起動を実行することはできません。Content Serverの再起動は、コマンドライン、Oracle Enterprise Manager、またはWebLogic管理コンソールから実行されます。Content Serverの起動と停止について、詳しくはシステム管理者ガイド (http://download.oracle.com/docs/cd/E14571_01/doc.1111/e10792/toc.htm) を参照してください。

Content Serverのプロキシ・インスタンス

Oracle UCM 11g Release 1以降では、Content Serverのプロキシ・インスタンスはサポートされていません。Content Serverインスタンスは本来"マスター"インスタンスであり、WebLogicドメインに配置されます。エンタープライズ配置のオプションとモデルについて、詳しくはエンタープライズ・デプロイメント・ガイド (http://download.oracle.com/docs/cd/E14571_01/doc.1111/e15483/toc.htm) を参照してください。

国際化の改善

Oracle UCM 11g Release 1には、国際化要件に関する拡張がいくつか含まれています。次にその例を挙げます。

- User Profileページ (My Profile) で、ユーザーがタイムゾーンを指定できます。
- ユーザーのプロファイルにロケールが設定されていない場合、Content ServerによってHTTPヘッダー変数からロケールが取得されます。

- タイムゾーン・リストがローカライズされています。
- Content InformationページおよびSearch Resultページで、少数フィールドや整数フィールドの形式がローカライズされています(ただし、フォーム入力フィールドはEN形式で表示されます)。

詳しくは、ユーザーズ・ガイド (http://download.oracle.com/docs/cd/E14571_01/doc.1111/e10797/toc.htm) およびシステム管理者ガイド (http://download.oracle.com/docs/cd/E14571_01/doc.1111/e10792/toc.htm) を参照してください。

ロギングとトレース

Content Serverのログ・ファイルは10g Release 3と同じ場所にあり、Content Serverの管理メニューからアクセスできます。また、このリリースでは、ログは中央にあるWebLogicロギング・インフラストラクチャに書き込まれており、Oracle UCMがインストールされているWebLogicドメインのEnterprise Managerダッシュボードからアクセスできます。

トレース情報には、Content ServerのSystem Audit Informationページにある"View Server Output"リンクから引き続きアクセスできます。以前のバージョンと同様、出力は一時的なものでありファイルには保管されません。また、トレーシング・フラグは、Content ServerのSystem Audit Informationページから設定できます。ただし、WebLogicのログ (Enterprise Managerダッシュボードからアクセス可能) に適切なトレース情報を移行するには、追加の設定変更が必要になります。

詳しくはシステム管理者ガイド (http://download.oracle.com/docs/cd/E14571_01/doc.1111/e10792/toc.htm) を参照してください。

WLSTおよびEnterprise Managerとの統合

Oracle UCM 11g Release 1では、WLST (WebLogic Scripting Tool) コマンドを使用してアクセスできるJMX MBeansが提供されています。WLSTコマンドを使用すると、特定の構成パラメータを表示または設定したり、ロギング情報を表示したりできます。また、Enterprise Manager 11gのページでも、同じ情報にアクセスして編集できます。WLSTおよびEnterprise ManagerとのOracle UCMの統合について、詳しくはシステム管理者ガイド (http://download.oracle.com/docs/cd/E14571_01/doc.1111/e10792/toc.htm) を参照してください。

Oracle UCMのディレクトリ構造

Oracle UCM 11g Release 1はWebLogicアプリケーション・サーバーに配置されており、新しい配置モデルに対応するために、実行可能ファイルやその他のファイルのインストール方法が変更されています。1番の変更は、サーバーのコア・バイナリなどの"読取り専用"実行時ファイルや標準コンポーネントはすべて1箇所に配置されているが、インスタンス固有のデータ・ファイルや構成ファイル、カスタム・コンポーネントなどの読取り/書き込み情報、"data"ディレクトリに含まれる情報は別々の場所に保管されている点です。同様に、vaultディレクトリとweblayoutディレクトリもそれぞれ別の場所に配置されています(10g Release 3と同じ)。ディレクトリ構造および新しい配置モデルについて、詳しくはエンタープライズ・デプロイメント・ガイド (http://download.oracle.com/docs/cd/E14571_01/doc.1111/e15483/toc.htm) を参照してください。

アップグレード

Oracle UCM 11g Release 1では、Oracle UCM 10g Release 3からのアップグレードがサポートされています。10g Release 3からのアップグレードについて、詳しくはアップグレード・ガイド (http://download.oracle.com/docs/cd/E14571_01/doc.1111/e16451/toc.htm) を参照してください。

参考資料

ドキュメント

Oracle UCM 11g Release 1のドキュメント・ライブラリには、http://download.oracle.com/docs/cd/E14571_01/ecm.htm からアクセスできます。

サポートされているシステム構成

Oracle UCM 11g Release 1でサポートされているシステム構成について、詳しくは <http://www.oracle.com/technetwork/middleware/content-management/oracle-ecm-11gr1.xls> を参照してください。



Oracle Universal Content Management 11g
Release 1 : 11g Release 1 と 10g Release 3 の
違い
2010年6月
著者 : Vijay Ramanathan

Oracle Corporation
World Headquarters
500 Oracle Parkway
Redwood Shores, CA 94065
U.S.A.

海外からのお問い合わせ窓口 :
電話 : +1.650.506.7000
ファクシミリ : +1.650.506.7200
www.oracle.com



Oracle is committed to developing practices and products that help protect the environment

Copyright © 2010, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved. 本文書は情報提供のみを目的として提供されており、ここに記載される内容は予告なく変更されることがあります。本文書は一切間違いがないことを保証するものではなく、さらに、口述による明示または法律による黙示を問わず、特定の目的に対する商品性もしくは適合性についての黙示的な保証を含み、いかなる他の保証や条件も提供するものではありません。オラクル社は本文書に関するいかなる法的責任も明確に否認し、本文書によって直接的または間接的に確立される契約義務はないものとします。本文書はオラクル社の書面による許可を前もって得ることなく、いかなる目的のためにも、電子または印刷を含むいかなる形式や手段によっても再作成または送信することはできません。

OracleおよびJavaはOracleおよびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称はそれぞれの会社の商標です。

AMD、Opteron、AMDロゴおよびAMD Opteronロゴは、Advanced Micro Devicesの商標または登録商標です。IntelおよびIntel XeonはIntel Corporationの商標または登録商標です。すべてのSPARC商標はライセンスに基づいて使用されるSPARC International, Inc.の商標または登録商標です。UNIXはX/Open Company, Ltd.によってライセンス提供された登録商標です。0410

SOFTWARE. HARDWARE. COMPLETE.